

# NCS HOKKAIDO

Nature Conservation  
Society of Hokkaido

2006年1月 NO.128

..... CONTENTS .....

チヨットひとこと.....林 吉彦..... 2	アメリカのダム撤去最新情報 in Hokkaido
森林・林業は「プロ任せ」でいいか	の報告.....佐々木克之..... 7
.....山本 牧..... 3	2006年自然保護学校開催のご案内
北海道各地のニュース..... 4	コラム・石川 幸男(1)..... 8
「滅びゆく高山植物を守るための市民	活動日誌・要望書など..... 9
フォーラム」を開催.....長谷川雄助..... 6	お知らせコーナー.....10



湧沸湖と斜里岳

(撮影：大館和広)

野鳥と風力発電

最近北海道の海岸線に発電用の風車がやたらと目につくようになった。そのうたい文句は、「自然に優しいクリーンなエネルギー」である。また、市民の共同出資で建設された「市民風車」と呼ばれる風車が北海道浜頓別を皮切りに全国に広がり始めている。その目指しているところは「原発にたよりたくない」「地球温暖化を防止したい」「未来に美しい地球を残したい」などで、その一つ一つを見る限り誰もが賛成できるものである。だが巨大な風車を何処に建てても本当に自然に優しいのだろうか。二酸化炭素を排出しないということだけが免罪符になっていないだろうか。風の通り道である広大な丘陵地帯、遠くまで延びる海岸線、そこを訪れた多くの人は心を癒され、この景観を次の世代に残そうと思う。林立する巨大な風車に覆われた丘陵地帯に美しさを感じる人もいるかもしれないが・・・。



ところで風車を建てる側の「自然に優しい」という考え方は人間の一方的な見方ではないだろうか。風車を回す風の通り道はとりもなおさず渡り鳥の通り道でもあるのだ。

今、津軽海峡を挟んで対岸に青森県大間崎を望む函館市戸井町汐首岬に風力発電風車の建設が計画されている。地上からの高さが60mから100m、風車の直径が45mから80mだという。この巨大な風車が渡り鳥の通り道に立ちふさがるのである。時速100kmを軽く超える速さで回転する風車は野鳥にとってまさしくギロチンそのものである。既に運転が開始されたところでは、天然記念物のオジロワシが真っ二つに裁断された死体が回収されている。

日本野鳥の会道南檜山支部は、汐首岬で渡り鳥の通過状況を調査した。その結果は予想をはるかに超える渡り鳥の通過を確認した。調査前は、松前町の白神岬が主要な渡りのコースとされていたからだが、もちろん日本でもトップクラスの渡りルートである白神岬には及ばないが、ノスリ、オオタカ、ハイタカ、ハチクマなどの猛禽類が次々と海を越えていくのだ。05年11月1日の調査では、なんとノスリ205羽、ハイタカ8羽、オオタカ2羽が海を越えたのに加え、ハヤブサが探餌行動を繰り返していた。さらに、ヒヨドリ、シジュウカラ、ホオジロを中心とする小鳥類が数千の単位で岬上空を通過していた。その多くは西に向かい白神岬を目指していると思われたが、ヒヨドリの群れの中には大間崎を目指して海に出る群れも確認された。これだけの野鳥が通過するのだからギロチンの犠牲になることは十分すぎるほど予想される。さらに心配なのはフクロウ類に加えて小鳥類の多くが夜に渡りをしているという事実である。夜の衝突を防ぐためにライトアップを考えるというが、その光が逆に風車に鳥を呼び寄せることになる。

「自然に優しい」というなら、風車の建設はもっともっと慎重でなければならない。

(当協会専門委員・七飯町在住)

林 はやし

吉 よし

彦 ひこ

## 森林・林業は「プロ任せ」でいいか

山 本 牧

森林を共同で維持管理して15年ほどになる。わずかな「山主（やまぬし）」経験からみても、今の森林・林業政策の非効率や無目的ぶりは目にあまる。「森を緑に」「林業は百年の計」などと耳当たりのいい言葉が踊り、環境保全に関心が高まっているわりには、現場の事情は少しも改善されていない。木材価格低迷や担い手不足など、基礎的な問題ももちろんあるが、林業政策が仲間うちの論理で進み、「外からの目」が欠けていることも理由ではないだろうか。

国有林特別会計は巨額の赤字に苦しんでいるが、同じ林野庁が行う民有林補助は意外に手厚い。というか、木材価格が国際競争でとんでもない低価格のため、補助がないと森の手入れが全く進まない、という現実がある。

人工林間伐の場合、特に若い林では、補助金の範囲で事業経費を捻出し、運び出した木材代金は「あるとありがたい」というケースが多い。もちろん、それが手入れを促進し、次世代の木材資源をつくる、という理屈なのだが、実態は「補助金制度に合わせた事業」という本末転倒が多く見られる。林相や地形、気象などに応じた施業を行うよりも、補助のメニューと割当枠に合わせる事業形態になりがちなのだ。

それに拍車を掛けるのが、山林所有者の関心の薄さだ。たいていの山主は、森林組合などが提示する事業計画にそのまま判をつく。つまり、森林組合や受注企業などの「事業者」と「所有者」はいるのだが、本当の意味の「経営者」は見あたらないのが実態だ。

「経営」抜きでコスト意識が先走った結果は、残された林のストック（資源量）向上に必ずしも結びつかず、質の低下や、台風に弱い林になったりする。さらに、荒っぽい伐採や林道建設は、林地の踏み荒らしや土壌浸食、沢への土砂流入などの環境問題を引き起こす。

林業が農業と大きく異なる点に、「収穫が生産を規定する」という考えがある。農業はふつう、前年の収穫方法が何であれ、種をまいたものがいちおう育つ。しかし、林業は間伐や択抜のやりかた次第で、次世代の林は大きく変わる。伐採率をどの程度にするか。どの木を切り、どの木を残すか。搬出で若木を傷めずにすむか。つまり、「きょうの生産」はイコール「あすの森林育成」なのだ。

そうした考えは、私有林だけではなく、国有林や道有林にもあてはまる。単年度の木材生産量や事業コストに目を奪われ、本来、最も大切にすべき森林の資源量や質、環境価値を軽視してはこなかったか。

何となく、山が緑に覆われていればいいというものではない。やたら生長量が高い森がいい森とも限らない。「持続可能な利用」が本当に実現されていることが重要だ。「林業は百年」という言い方も、役人が自分の責任を先送りする方便に聞こえる。森林は十年きちんと手入れすれば、結果は出なくても、方向性は見えてくる。五年、十年の積み重ねが百年なのだ。目的を見失った「事業のための事業」がなんと多いことか。

林業はいま、事業計画を立てる行政官や団体職員はいるが、現場の森を見て持続的な「経営」を考える人は数少ない。それに意見を言ったり、異議申し立てをする素人はさらに少ない。「プロ任せ」から抜け出すことを考えないと、森の将来は危うい。（旭川市在住）

## —市民の宝物・円山を守る運動から— 自然の基礎調査を — 大谷 節子 (会 員)

2000年から始まった札幌市中央区の小さな山(226m)・天然記念物円山を守る市民運動の若干の経過と成果、そして今後の展開に向け、私が現在いちばん問題に思っている事について述べたい。

1990年代後半から、藻岩山・円山周辺では高層マンションの建設ラッシュが始まった。これは1996年の札幌市の用途地域の変更に伴うもので、それまでの低層地域が高層地域に変更されたことによるものだという事を、この運動の中ではじめて知った。

2000年春、大手不動産会社が、円山公園ぎりぎり15階建てマンション建設を予定しているというので、地域住民中心に「円山のみどりと景観を守る市民の会」を結成し、円山の周辺はみどりのバッファゾーンとして、高層マンションの建設には反対という運動を展開。その中心は「高層から低層へ」という用途替えを掲げ、市議会への請願のための署名をあらゆる機会で行なった。

その結果、市議会総務委員会で審議が行われ、一応採択された。しかし、最も強く要求した「用途替え」は削除するという条件付であった。その後、札幌市は風致地区のわずかな拡大、地区計画制度の創設、紛争条例の施行などを行ってきたが、高層マンションの建設ラッシュを止める決定的な規制にはなっていない。

このような札幌市の状況の中で、私はこの運動の原点「円山のみどり(円山の生態系)を守る」ということを、しっかり行政(国、道、市)に認識してもらい、実行して欲しいと考えている。そのために、周辺に高層物が建設されることによる自然に対する量的・質的影響(地下水系、草樹、生き物など)、また道路整備に伴う交通量、とくにガソリン車輛増大によるNOXやSPMの影響がどうなっているのか、客観的数値が経年的に必要なと思うが、そういう調査をぜひ、公的機関で、客観的人材を配置して行なって欲しいと強く願っている。  
(札幌市在住)

## 河川環境劣化が深刻化する道南情報 — 稗田 一俊

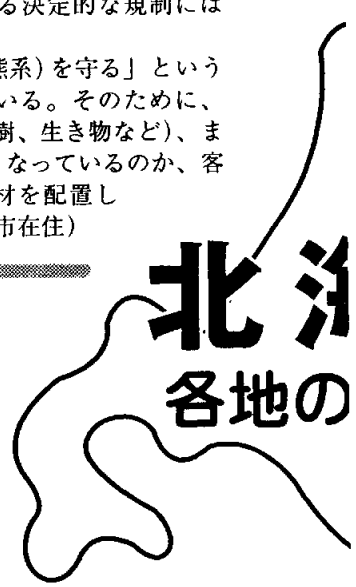
(理 事)

長万部町国縫～森町にかけて高速道路並に拡幅工事が進む立派な国道5号線だが、これに平行して北海道縦貫自動車道(高速道路)も急ピッチで建設中だ。この建設工事では国縫川支流のサクラマス産卵河川が埋め立てられ、沿線の小河川が甚大な影響を受け荒廃が進んでいる。数年前から、北海道自然保護協会専門委員の林吉彦氏とともに、工事担当者に対して、工事現場から砂泥を出さないように繰り返し改善策を申し入れてきたが、今なお砂泥の流出が絶えず、川底には大量の泥が沈殿、河川生物の激減・絶滅は免れない状況だ。「環境影響調査」がありながら、その影響が回避も低減もされないこの調査とはそもそも何なのか。現場からは調査会社(コンサル)が儲かる仕組みだけが見えてくる。

函館では桔梗町と古川町の国道278号線を結ぶ新外環自動車道(地域高規格道路)が計画されている。面白いことに、行政の環境破壊を伴う事業に対して「影響有り!」と待ったをかけてきた函館のNPO団体が当道路計画の環境調査を行なっている。調査結果がどのように反映されるのかご注目頂きたい。

また、同NPO団体は厚沢部町「レクの森」を流れる畑内川(上流に20基以上のダムがある)の河川工事に際しても環境調査を行い、コンクリート三面張り護岸を「10m剥がして数ヶ月の調査を見ながら5年かけて取り払う」檜山支庁の工事計画にも関与している。去る12月20日、「厚沢部町レクの森管理計画策定委員会」の要請で檜山支庁の現地説明会が開かれ、参加した。「数ヶ月の調査は短い。2、3年間の調査が必要」と委員からの指摘がある一方、この工事が同NPO団体と札幌のコンサルと檜山支庁の3者間で練られていたことが判明し、地元委員会には工事内容の説明が知らされただけだったという。上流のダムに手を加えず護岸を剥がせば、増水時、川が荒れて新たな被災が懸念されるので、危機的な財政にある支庁の判断に甘さを感じた。

その他、戸切地川、八木川、鳥崎川、落部川、野田追川、遊楽部川、見市川…などなど「河床低下」が急速に進んでおり、川岸が崩れ、川幅がどんどん広がっていく。その他にも平取ダム計画、サンルダム計画、当別ダム計画、ポソオサツ(ユオイ)川砂防ダム計画、知床岩尾別川の既設ダム問題などなどあるあるある…荒れた川を前にため息ばかりが出る。  
(八雲町在住)



## 「ふるさとの海を守ろう」

大館 和広

(理事)

昨年11月末オホーツクの紋別市である団体の設立総会が開かれた。日本では初めて(世界でも?)と思われるこの団体は「オホーツクの環境を守る地域ネット(OEPN)」という。この団体はサハリンの油田開発に伴い必ず起きるであろう油流出事故を想定し、事故の起きる前から事故に備えて活動していくという趣旨で設立された。設立総会ではこの他にも海洋汚染や環境破壊にも同様に取り組んでいこうと提案され承認された。設立には遠くは石川県や埼玉県の大学教授や道内でも札幌市や釧路市からも参加者があった。勿論地元からも漁業関係者をはじめ多くの人々が参加し、この問題の関心の高さを示していた。関心の高さは、サハリン北部海岸一帯で行われている油田開発地帯で万が一油の流出事故が発生した場合に日本で一番先に被害を受けるだろう地域のひとつというのもあるが、紋別市で毎年2月に行われている「流氷シンポジウム」の人脈によるところが大きいだろう。

ナホトカ号の事故から早いもので9年が経つが、この間私たちは教訓として得たものを生かして来れたのだろうか?。油漂着の現場となった石川県ではあの時のままの海岸が世に知られず存在しているとも伝え聞いた。

隣の韓国では昨年自国での油流出事故から節目の10年にあたり、大々的な行事が行われたという。出席した人の話では、「教訓を生かし確実に体制を整えつつある」という。

昨年6月には協会も共催して油汚染に関するシンポジウムも開催されており、関心は低いわけではないが、行政NGOともに取り組みが順調にすすんでいるとは思えない。

今後は協会が中心となりこのような地域のNGOとどのように連携をとり、万が一の事態に備えていくのか体制作りも進めていかなければならないだろう。(紋別市在住)

## 道 ニュース

## 道東の自然とその評価は

岡井 健

(会員)

道東とは行政区画としては十勝、網走、釧路、根室支庁を指すものと思われます。

ここには、阿寒、知床、釧路湿原の国立公園があるばかりではなく、3つの道立公園に加えて今や7つのラムサール登録湿地があります。

道東を「豊かな自然が残されていると」多くの人々が感嘆しますが、それは登山者が感動する山であり、バードウォッチャーや写真家が狙う湿原であり、カヌーイストたちが集う川など限られたところudur。あるいは、樹木のない平坦な農村を突き抜ける幾何学的な直線道路ですら「豊かな自然」と喜んでもらえます。本当に賞賛されるほどの自然が残されているのでしょうか。

湿原はかつて「不毛の土地」と言われ開発されなただけです。河川も小さな支流や湧水地域の多くは出来の悪い農地になり、強引に地下水位を下げ小動物が棲めない直線の排水路が造られています。食料自給率が極端に低いこの国の農業は、後継者をなくし地域は疲弊しています。その一方で、数千万円もする住宅を建て、数百万円の乗用車を複数台乗り回している農家が珍しくはない状況にもなっています。

大規模化して経営的に成功した農家は、農業生産の基本に忠実であったからとは思えません。重機を多用し農業に依存する畑作や、輸入穀物を多給する畜産などは循環とは無縁の収奪型、環境汚染型農業といえます。

小規模ながら環境に負荷をかけることなく、ゆったりとした時間の中で作物を培い家畜を慈しみながら農業を営む人たちは、国や消費者から評価されることなく経済活動の外にいます。健全な農家が育まらないこの国は食料自給率を極端に下げて飽食と環境破壊の中、隅っこに追いやられた自然遺産の付加価値を高めることに躍起になっています。

(別海町在住)

## 「滅びゆく高山植物を守るための市民フォーラム」を開催

北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会事務局長 長谷川 雄助

11月19日午前10時30分から午後5時20分の間、北大学術交流会館において、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会主催により、加盟団体メンバーや、市民など190人が参加して開催された。

第1部「高山植物保護活動を振り返るパネルディスカッション」では、小野有五委員長がコーディネーターとなり水野洋一アポイ岳ファンクラブ、佐々木純一雨竜沼湿原を愛する会、吉沢隆エコ鳥牧、清水和男山歩集団青い山脈、水尾君尾ユウパニコザクラの会のそれぞれの団体の代表から、地域の山の現状とパトロール活動などが報告された。

フロアから、山岡桂司岨山自然保護協議会代表が、1999年から入山制限を継続してきて、植生が回復したことや、登山者の意識調査でも高山植物を守るためには入山制限は有効であるという意見が多かったと発言した。

午後、第2部の講演は工藤岳北大大学院地球環境科学研究院助教授の「高山植物と雪の関わり、そして地球温暖化の影響」。多様な高山植物が共存できるのは、雪の積もらない風衝地と、夏まで残雪が見られる雪田で、生育場所を決めていること。高山の厳しい気候環境を反映して、昆虫の種類や量は季節とともに大きく変わること。地球温暖化が高山植物群落の多様性を大きく損なっていることが実験で証明できたことなどについて話された。

第3部、離島からの報告で、小杉一樹利尻島自然情報センター主宰は利尻山、鷲泊コースと杓形コースが合流する、通称合流点付近を中心に登山道の侵食、拡幅、裸地化が進んでいること。環境省によるグリーンワーカー事業を地元市町村、宗谷森林管理署などで作る「利尻山登山道等維持管理連絡協議会」が受託して、土嚢を作成して登山道の侵食の深い谷部にステップ状に一個ずつ設置したことを報告し、「登山道にやさしい下山の仕方を考えて欲しい」と結んだ。

礼文島のレブンアツモリソウの保護活動に取り組んできた、柚田美野里レブンクル自然館副代表は、1997年にレブンアツモリソウ群生地で大量の盗掘があったが、奇跡的に助かった1株が、今年8年経過して開花したこと。盗掘からレブンアツモリソウを守るには、培養苗を販売して市場価格を下げて普及することも模索していると語った。

佐藤謙北海学園大学教授（北海道自然保護協会会長）は、「北海道条例と希少植物の指定と保護の現状」と題して報告を行い、高山植物の保護活動を進めるためには現状調査とモニタリング調査が大切であると強調した。

第4部、講演は梅沢俊植物写真家の「山歩き 花めぐり」と題して、スライドを使いながら、普段目に付かない高山植物を紹介した。

最後に「未来をにう子供たちに、高山植物を守ることの大切さ、山の自然の素晴らしさを小さいときから知ってもらうような教育をみんなで作っていきましょう」など7項目を入れたアピール文を採択し、市民への高山植物保護活動の大切さを訴えて終了した。

（札幌市在住）



## アメリカのダム撤去最新情報 in Hokkaido の報告

理事 佐々木 克之

標記講演会が12月6日夜、かでの2・7で開催された（主催：北海道の森と川を語る会・(社)北海道自然保護協会）。サンルダムや当別ダム問題があることもあって、約140名の参加で盛況だった。

### 1. アメリカでのダム撤去そのプロセスと現状：デイヴィット・ウェグナー

通訳付きで約1時間講演。ウェグナーさんは生物学と河川工学の専門家。最初に、世界の河川を見て、(1)環境は社会の基盤、(2)河川は地球の血管、と感じたと述べた。ダム撤去において必要な考え方は、(1)代替案を集水域全体で考える、(2)対話を通じて意志決定する、(3)社会と環境のバランス（環境維持がビジネスの対象となる時代、アメリカの河川工学は今ではダム建設ではなく、河川修復が主流）。

21世紀では水はもっとも価値ある資源になる。サケ科魚類は、clean、cold、clearな水が必要とし、河川の健康度を測る指標種である。それぞれの地域にはその地域に対応して進化したサケ科魚類が存在しているので、そのことを十分配慮しなければならない。ダム撤去の背景には、安全性や責任（訴訟がよく起きる）、絶滅危惧種問題、生態系の再生、維持・管理のコスト（とくに堆積物除去が大きな問題）などがある。

ダム撤去の問題点 1) 物理的……水理、地形、堆積、2) 生物的……魚、鳥、動物、3) 社会的……危険性、美観、文化（native文化）、4) 経済的……費用対効果

ダムは川を分断し、魚の移動を止め、植物相を変化、水質を変える。しかし、ダムはすべて駄目とかすべてに勝るという考え方はよくない、中間的答申があり、水理学、地形学、生態系、多様性などよく分析することが必要。「河川は子孫からの借り物で、健康な状態で子孫に返す」ネイテヴの人の考え（有明海漁師の主婦の言葉：海は借り物なんよ、子供たちに返すときはきれいにしてから返そうね、これが私たちの合言葉（土田信子）：日本にも同じ考えがありました：筆者注）

### 2. 北海道での砂防ダムの現状：稗田 一俊

砂防ダムができると、その下流で河床低下と泥化が進行することを、写真で具体的に、生々しく示し、ダムは小さくても大きな環境悪化を引き起こし、サケなどが産卵できなくなることを聴衆に実感させた。

### 3. 持続的社会とダム問題：市川 守弘

アメリカの国有林をめぐる科学者委員会レポート（クリントン政権で作成、ブッシュ政権で凍結）を紹介、経済的、社会的、文化のおよび生態的持続性、生態的持続性が優先課題、1) 独立した科学者による、2) 独自の観点からの調査、3) モニタリングと評価、によって持続的な国有林を維持するかんがえ、ダムについても同様なことが必要であるが、日本では独立した機関による科学調査はない。持続的視点からの取り組みが必要である。（札幌市在住）

## 2006年自然保護学校開催のご案内

2006年自然保護学校を下記の日程で行います。

今年は「最近の自然情報」としてそれぞれの専門家にお話をさせていただきます。自然保護学校の講義は、私たちを取り巻く環境をよりよい状態に保つために、自然を良く知り、自然が大切であることを理解していただける内容で取り組んでおります。

広く市民の方々に理解していただくよう、スライド、OHP、パソコンプロジェクターなどを使用し、分かりやすい内容に努めますのでぜひご参加ください。

**主催**：(社)北海道自然保護協会 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル6F

**場所**：札幌学院大学社会連携センター TEL 011-280-1581

(札幌市中央区大通西6丁目 地下鉄大通り駅出口1番徒歩1分)

**日程・講師** 各日18:00~20:00

3月1日(水)開校式・「北海道のコウモリ」柳川 久(帯広畜産大学野生動物管理学研究室)

3月8日(水)「北海道の淡水魚・外来魚」堀山 雅秀(北海道大学水産科学研究院)

3月15日(水)「大型猛禽類の現状」白木 彩子(北海道大学院地球環境科学研究科)

3月22日(水)「北海道の希少植物保護の現状—ヒダカソウを例にして—」西川 洋子

(北海道環境科学センター・自然環境部植物環境科)

3月29日(水)閉校式・「昆虫は北海道の冬をどのようにして越すのか」片桐 千賀

(北海道大学低温科学研究所)

\*3月1日は受付、開校式がありますので早めにお集まりください。

\*諸事情で講師の順序が変わる事がありますのであらかじめご了承ください。

**定員**：60名 **参加費**：3,500円、協会会員・学生3,000円(開校日に徴収)

**問合せ・申込み**：北海道自然保護協会 TEL・FAX 011-251-5465 Eメール info@hokkaido.or.jp

128号から4回連続、つれづれなるままにコラムを石川さんにお書きいただきます。

石川幸男さんのプロフィール

1956年東京生まれ、当協会理事、専修大学北海道短期大学園芸緑地科教授、知床世界遺産科学委員会委員など数多く歴任、相当なカメラマニア、テノール歌手にしたいほどの豊かな声量の持ち主

### コラム

## よくある保全・再生用語の誤用例とその対応策

### その1 ビオトープ

石川 幸男

水辺ビオトープ、学校ビオトープ、屋上ビオトープなど、はては水槽ビオトープまであるらしい。最後のは典型的に歪小化された例。北海道では取り組みがそれほど多くないが、本州では大流行のようだ。

本家であるドイツでは、生物の住みかであるビオトープを相互に連結して、地域本来の生物相を豊かにするビオトープネットワークの考え方が確立している。一方、日本においては、上のように、本来はネットワークの一部であるパーツだけを取り上げている場合がほとんどのようだ。ネットワークに言及しても、総論として重要だと述べるだけで、具体的には触れられない。そもそもネットワーク作りは、個々のビオトープに関わる個人や団体では難しい。行政が枠組を作るか、あるいは少なくとも、どこかの局面で主導的な役割を果たす必要がある。そして個々のビオトープとして重要なことは、本来の地域の生物相の維持、復元に貢献するという一点に集約できるだろう。

ビオガーデンなるものもあるらしい。ビオトープの考え方にもとづいた庭のようであるが、しかし、堂々と外来種も用いられているので、どう見てもただの庭や花壇にしか見えない。ビオトープ本来の思想に従うのであれば、在来種と持ち込まれた外来種とが交雑することによって生じる遺伝子汚染は、絶対に避けなければならないはずなのに、何も触れられてない。ビオガーデンなどと命名する必要がどこにあるのか全然わからず、庭園の新規事業開拓に使われているだけ、という気がする。



## 活動日誌

### 2005年11月

- 2日～3日 大規模林道・「様似～えりも区間」  
予定地視察並びに道有林間伐、皆伐現場  
調査
- 8日 天塩川流域委員会の運営に関する申し入れ  
書提出&記者会見  
※サンルダムに反対する13団体と共同行  
動
- 15日 第5回拡大常務理事会、会報127号発送
- 17日 北海道森林管理局へ面談申し入れ  
奥湯ノ岱伐採現場(上ノ国町)入林許可  
について
- 25日～26日 檜山森林管理署内「奥湯ノ岱伐採  
現場」調査視察
- 28日 第9回天塩川流域委員会傍聴(土別)

### 2005年12月

- 5日～6日 ダムフォーラム：講演会「アメリ  
カのダム撤去最新情報 in Hokkaido」  
参加(旭川・札幌)
- 7日 第1回沙流川流域委員会傍聴(平取)
- 10日 第2回理事会
- 16日 大規模林道問題「申し入れ書・再質問書」  
提出(対道公開交渉)&記者会見  
※大規模林道問題北海道ネットワーク加  
盟団体と共同行動
- 22日 天塩川流域委員会の運営を見直すことを  
求める再申し入れ書提出&記者会見  
(第9回天塩川流域委員会傍聴記一自主  
作成—公開)  
※サンルダムに反対する13団体と共同行  
動
- 26日 第10回天塩川流域委員会傍聴(土別)
- 27日 第2回沙流川流域委員会傍聴(平取)

## 新会員紹介

2005年8月～2005年11月

### 【A会員】

坂西 真也、吉川 大輔、長谷川雄助、  
小川 岳洋、埴山 雅秀、久野真紀子、  
近野 里美

## 寄付金

富士ゼロックス端数倶楽部	100,000円
富士ゼロックス株式会社	100,000円
梅沢 俊	10,000円
ブーケドソレイユ(前田正子)	20,000円
岡部美恵子	10,000円

## 要望書など

- 2005年10月14日 一般国道39号北見バイパスの  
予算凍結に関する要望書 (財務大臣宛)  
※北見の自然風土を考える市民連絡会連名
- 2005年11月8日 天塩川流域委員会の運営に関  
する申し入れ書 (天塩川流域委員会宛)  
※サンルダム建設計画に反対する13団体連名
- 2005年11月17日 北海道森林管理局檜山森林管  
理署内「奥湯ノ岱」における伐採現場への入林  
許可に関する申し入れ書  
(北海道森林管理局局長宛)
- 2005年11月24日 ラリー・ジャパンからの撤退  
に関わる質問および要請(毎日新聞社社長&ラ  
リー・ジャパン2005実行委員会委員長各宛)  
「[ラリー・ジャパン2005(WRC)]の環境問  
題に関わる再要請書」への回答依頼  
(小池環境大臣宛)  
ラリーの環境問題に関わる説明会開催の要請  
(A.G.メンバーズスポーツクラブ北海道代表&  
十勝毎日新聞社社長各宛)  
北海道十勝におけるラリー開催に関する指導の  
要請 (社団法人日本自動車連盟会長宛)  
※各4団体連名
- 2005年12月16日 知事として事業の必要性も効  
果も具体的に説明することができないのに、多  
額の道費負担をしている「緑資源幹線林道」事  
業から撤退することを求める申し入れ書並びに  
再質問書 (道知事宛)  
※大規模林道問題ネットワーク5団体連名
- 2005年12月22日 天塩川流域委員会の運営を見  
直すべきである—第9回天塩川流域委員会傍聴  
記を作成しての市民側の見解—  
(天塩川流域委員会委員長宛)  
※サンルダム建設計画に反対する13団体連名
- 2005年12月26日 大雪山国立公園登山道管理水  
準(案)と登山の心得(案)に対する意見  
(環境省北海道地方環境事務所宛)
- 2005年12月27日 沙流川水系河川整備計画  
[変更](原案)に関する意見  
(室蘭開発建設部治水課宛)

## 寄贈図書紹介

「知床の植物Ⅰ」斜里町立知床博物館編  
北海道新聞社刊  
斜里町立知床博物館館長：中川 元さんより  
佐藤 謙さん・石川幸男さんより

**\* お知らせコーナー \***

**自然保護講演会**

**「日高山脈と夕張山地を国立公園に昇格させよう」**

北海道は豊かな自然に恵まれています。最近では知床の世界遺産登録が注目されていますが、日高山脈(国立公園)と夕張山地(道立自然公園)は、知床・阿寒・大雪山などと異なった特徴を持つ原始的な自然環境として、世界に誇り得る存在です。しかし日高山脈と夕張山地はまだ国立公園になっていません。

日高山脈と夕張山地は、どのような特徴ある優れた自然環境なのか、その地質的な生い立ちや植物的自然、国立公園としての可能性などを知っていただきたいとの願いを込め、下記のように講演会を企画しました。多くの皆様のご来場をお待ちしています。

**記**

**講演**

「日高山脈と夕張山地・国立公園としての可能性」

依 浩三(専修大学北海道短期大学名誉教授)

「日高山脈と夕張山地の植生」 佐藤 謙

(北海学園大学教授)

「日高山脈と夕張山地の生い立ち」 在田一則

(北海道大学総合博物館資料部研究員)

日時: 2006年2月22日(水) 18:00~20:30

会場: 北海道環境サポートセンター

多目的ホール

札幌市北区北7条西5丁目 札幌千代田ビル1F

(ヨドバシカメラ向かい)

定員: 70名

会費: 無料

申込み・問合せ: 北海道自然保護協会

TEL・FAX 011-251-5465

Eメール info@nc-hokkaido.or.jp

**緊急市民集会**

**「当別ダムを検証する!」のご案内**

日時: 2006年1月21日(土) 18:00~20:00

会場: かでの2・7(820研修室) 8F

札幌市中央区北2条西7丁目

☎ 011-204-5100

**講演と報告**

講演1 「当別ダムのムゲと恐ろしさー今からでも遅くない! みんなで中止を考えよう」

小野有五(北海道の森と川を語る会代表)

講演2 「ダムが新たな災害を引き起こす? ダム建設後から災害補修工事が増大する」

稗田一俊(北海道自然保護協会理事)

報告「当別ダムの現状報告」

安藤加代子(当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会代表幹事)

申込み: 不要

資料代: 500円(会場でいただきます)

問合せ: 石川(011-219-0112)

伊関(0133-72-8161)

主催: 当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会

協賛: 市民ネットワーク北海道

後援: (社)北海道自然保護協会 北海道の森と川を語る会

**総会日時のお知らせ**

2006年度の定期総会の日時が決まりましたので出席予定としてご都合いただけますようお願いいたします。

日時: 2006年5月27日(土) 13:00から

総会終了後15:30より17:00まで

記念講演会予定

場所: 北大学術交流会館 会議室

(札幌市北区北8条西5丁目)

今期は理事改選期となっております。

詳しい内容が決まり次第お知らせいたします。

**編集後記**

明けましておめでとうございます。理事、事務局一同、今年もよろしく願いいたします。

NCの編集も各地で起こる問題を羅列する事に終わり反省しております。

内容充実のため皆様の建設的な声を期待しております。編集委員・福地郁子

**会費納入のお願い**

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員 4,000円

個人B会員 2,000円

(A会員と同一世帯の会員)

学生会員 2,000円

団体会員 1口 15,000円

**〈納入口座〉**

郵便振替口座 02710-7-4055

北洋銀行大通支店(普通) 0017259

北海道銀行本店(普通) 0101444

札幌銀行本店(普通) 418891

**〈口座名〉**

社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

